

私が所属していた吉本新喜劇では、暗黙のルールがありました。それは若手芸人が安易に先輩をいじらないこと。いじるとは、その人の見た目や性格などのキャラクターを笑いに変えるお笑いの手法のことです。当時の新喜劇で言えば、こわもてのキャラクターで出てきた島木譲二さんをクマに見立てて「クマだ」とみんなで逃げる一連の流れがいじりになります。キャラクターのある先輩のいじりは大きな笑につながります。

⑥ 守るべきルール



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

ある日、同期の芸人が舞台上で先輩をいじって笑いを取りました。若手芸人のいじりではありませんが、キャラクターのある先輩の元々の人気もあり、笑いが起き、楽しい雰囲気のまま舞台は終了。しかし、舞台後の楽屋は真逆の状態です。いじった芸人は先輩から指導を受けていました。笑わせるのが芸人の本来の仕事、いじりは人を「笑いのもの」にする行為、それを実行するには、相手に対する敬

意とスキルが必要であるということ。先輩は熱く語っていました。いじる側は愛情と責任を持ち、いじられる側に嫌悪感が発生しない関係があつてはじめていじりは成立するのです。一見自由な笑いの中にもしっかりとしたルールがあるのです。

うこともあり親しみをもって、よくいじられることがあります。「福岡」という私の名字をいじって「鹿児島くん」などと呼ばれることがあります。これは正直、全然面白くありませんが、誰も傷つけないので「福岡や！」と私が陽気にツッコミを入れておけば、その場は楽しい雰囲気になります。しかし、友人が経験したいじりエピソードは不愉快な内容でした。友人は知り合いに冬のベランダに締め出さ

れ、戸惑う姿を笑われたそうです。「社会人にもなって、人を笑いものにして恥ずかしくないか？」と説いた友人に対して謝罪したその相手は30歳前後の立派な社会人。面白がっていたのは本人だけで、全く笑えない話です。

対する敬意がなく行動し、嫌悪感を抱かせた時点でいじりはいじめとなります。

誰一人傷つけず、幸せにすること

このようなエピソードは育児や学校現場でもあり得る話です。面白半分で誰かがいじられるということはなかったでしょうか？笑いは人を幸せにします。しかし、たとえ信頼関係があっても相手に

「教育×笑い」のエデュテイメントには笑いの要素があります。その笑いには守るべきルールがあります。それは「絶対に人を傷つけないこと」。笑いは誰一人傷つけずに成立させることが必須であり、エデュテイメント実践の際は、これが大切なこととなります。

|| 毎月第1土曜に掲載予定です